

菊の挿木に関する試験

住友昭利・後藤田栄一

I はしがき

菊栽培の研究報告は極めて多いが、挿木についての報告は少なく、従来の経験に基く方法で挿木をしている。そこで筆者らは、床土及び、挿穂の取扱いにかたについて2, 3の試験を行なったところ予期した成果を収めたので、ここに報告する。

II 実験材料ならびに方法

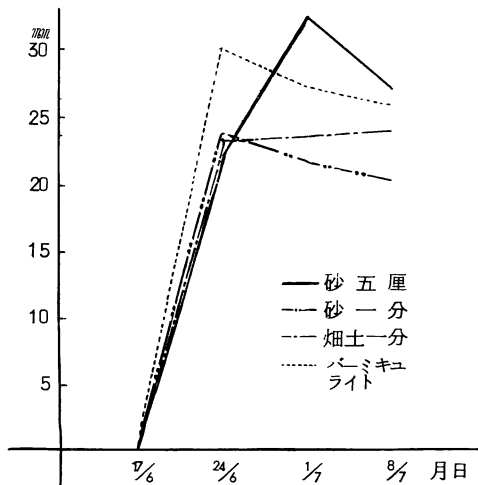
秋菊を用い、1963年6月10日に、挿穂の長さ約8cm(展開葉4枚)のものを、1区40本の2区制で挿木し、以後毎週1回10本づつ堀上げ、発根状態を調べた。試験の区分は次のようにした。

1. 床土の種類試験は、川砂Ⅰ(砂の大きさ1.5mm以下)川砂Ⅱ(砂の大きさ3mm以下)、畑土(土塊の大きさ3mm以下)、及び、パーミキュライトの4種類とした。
2. 葉の取扱い方と発根の関係は、全葉をつけた区、展開葉を1/2に切断した区、及び、展開葉を全部除去した区をもうけた。
3. 挿穂切断場所と発根については、節直下で切った区と、節間で切った区をもうけた。
4. 挿穂採取部位と発根では、芯挿(茎のやわらかい部分)と、茎挿(茎が木質化した部分)を比較した。

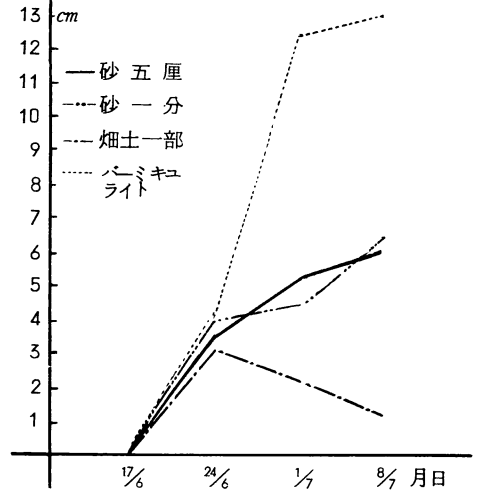
III 実験結果

1. 床土の種類試験における各区の発根状態は、第1図及び、第2図に示す通りであった。

第1図 床土の種類別発根数



第2図 床土の種類別根の伸長

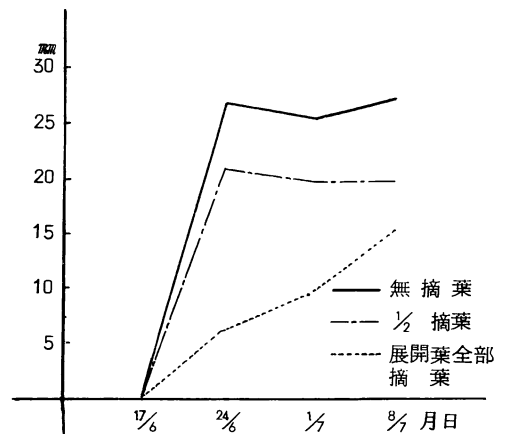


発根数は、パーミキュライトと川砂Ⅰがよく、畑土、及び、川砂Ⅱは劣っている。挿木後3週間以後発根数が少なくなっているのは堀上げ時に切れたものと思われる。

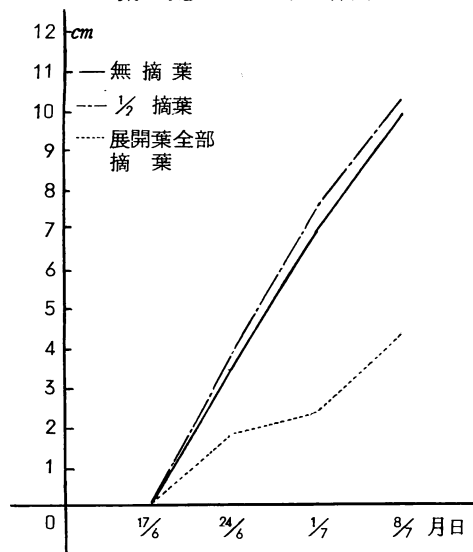
根の伸長は、パーミキュライトが最も長く、次いで川砂で、川砂Ⅰ、Ⅱの差は認められなかった。畑土は最も悪く、3週以後は短くなっている。これは堀上げ時に切れたものと思われ、苗を移動する場合、他の床土にくらべ植傷みが出やすい。

2. 葉の取扱い方と発根の関係は、第3図及び第4図の通りで、発根数は、全葉区が最も多く、展開葉を全部除いたものは約半数となっている。特に2週間目などは、1/2程度で、それ以後の根の増加率も非常に悪くなった。

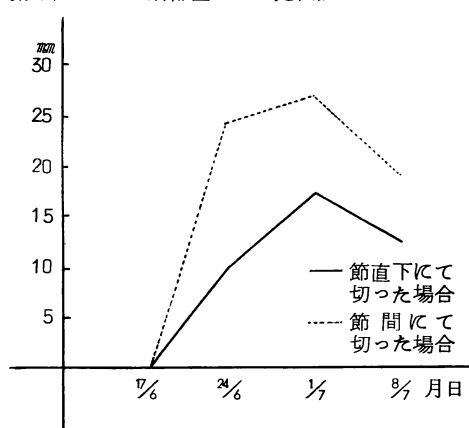
第3図 葉の取扱いによる発根数



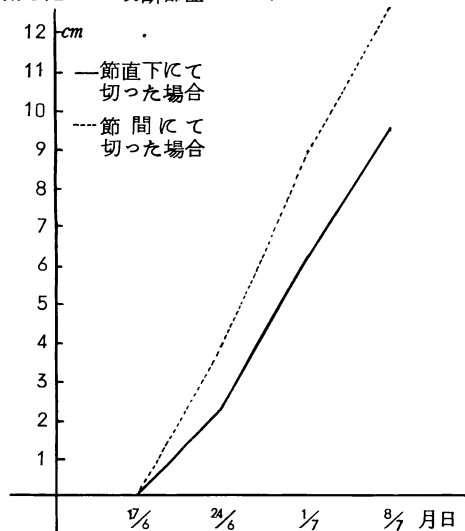
第4図 葉の取扱いによる根の伸長



第5図 切断部位による発根数



第6図 切断部位による根の伸長

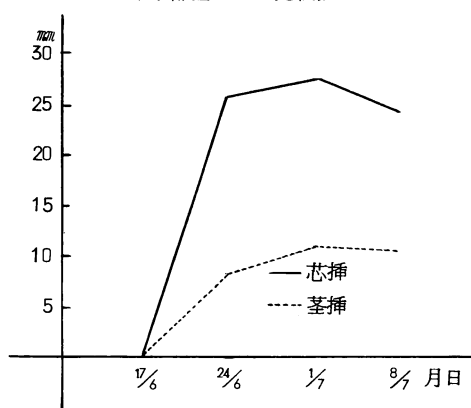


根の長さでは、全葉区と 1/2 摘葉区の差は認められないが、展開葉を全部除いたものは発根数と同様、約半分の 4.4 cm の伸びにすぎなかった。

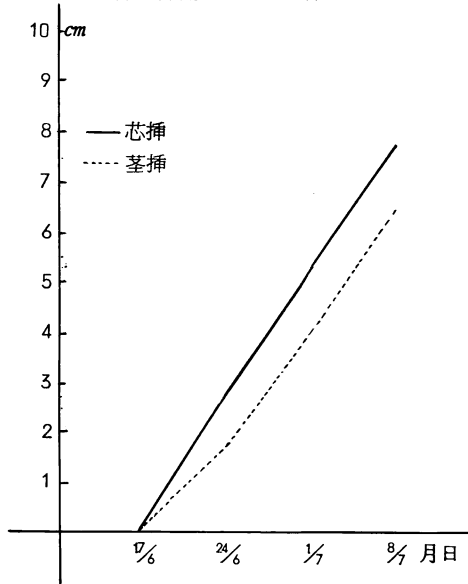
3. 挿穂の切断部位と発根の関係は、第5図・第6図の通りで、節直下で切ったものより、節間で切ったものが発根数、根の伸長ともに、あきらかによくなり、2週間目には発根数で約 2.5 倍、根の長さも 2 倍にちかい 4 cm となった。

4. 挿穂の採取部位と発根の関係は、第7図、及び第8図の通りで、根の伸長には、芯挿、茎挿ともに大差はないが、根数では、茎のやわらかい芯挿が茎挿の約 2 倍の発根数をしめした。

第7図 挿木部位による発根数



第8図 挿木部位による根の伸長



IV 考察

菊挿木における床土は、パーミキュライトが最もよいが、入手の難易および経済性からみて、川砂が最も有利であり、砂の大きさは 1.5 mm 以下のものがよく、畑土の

場合は特に苗の移動の時に根が多く切れ、植傷みが多くなるので床土として適当ではない。

挿穂の調整にあたっては、挿穂は生長点部をとり、節間で切ることによって発根状態をよくするものである。

葉の取扱いとしては、全部葉をつけたままがよいが、挿木時の取扱いに不便な場合は、半分までは摘葉してもよいと思う。

挿床での育苗期間は、各試験区とも根数が挿木後3週間目を最高に以後少なくなっている。これは苗の掘上げ時に切れるか、水分過多等によって根腐れをおこし短くなったものと思われ、いずれにしても苗の移植の植傷みを多くするものである。したがって、挿床育苗期間は挿木後20日ぐらいが適当であろう。

V 摘 要

1) 菊挿床の床土の種類、及び、挿穂の調整方法について調査をした。

2) 床土はパーミキュライトが最も優れているが、経済的にみると川砂で十分であった。

3) 葉は多くつけたものほど発根数は多かった。

4) 挿穂の切断場所は、節間部で切った方が、節直下で切ったものより発根状態はよかった。

5) 挿穂採種部位は、芯挿（茎のやわらかい部分）が茎挿（茎が木質化した部分）より、約2.5倍の発根数を示した。

6) 挿床育苗期間は、20日位いが適当ようである。

参 考 文 献

西村賢治：秋菊の挿芽に関する2,3の考察 農業及び園芸 Vol 13 №4 (1938)

志佐 誠・万豆剛一：Soil conditioner の園芸利用に関する研究 園芸学会雑誌 Vol 26 №4 (1957)

田村輝夫・他2名：観賞樹木の挿木に関する研究（第1報）．挿木時期と活着率について．園芸学会雑誌

Vol 26 №1 (1957)